

ひょうたん島通信

大槌発! 第41回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



石碑から見える地域の歴史

吉村健司 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター
沿岸保全分野 特任研究員

沿岸センターの目と鼻の先に、ひょうたん島（蓬萊島）があります。ひょうたん島に祀られている弁財天の横に、オットセイの碑が建っているのをご存知でしょうか。このオットセイの碑は1952年5月に建立されたものです。戦後、センターのある赤浜地区には日本、アメリカ、カナダの3か国によるオットセイの研究施設があり、生態調査が行われていました。これがきっかけとなり、オットセイの供養碑が建立されました。供養碑の台座には生態調査に参加した船名が記され、その上には「平和祈願おとせい供養」と刻まれた球状の碑がありました。

これらは、一般的に「動物供養碑（塔）」と呼ばれています。動物は世界的に見れば「供儀」の対象ではあっても、「供養」の対象となることはほとんどありません。この動物供養は日本特有の文化といえます。ところで、日本は周囲を海に囲まれた島国で、水生生物と深く関わってきました。これは水生生物の供養碑という形で表れています。供養の対象は様々で、岩手県内には、サケ、ウミガメ、クジラ、アワビ、イルカ、ウナギ、トド、ノリ、

コイといったものも見られます。大槌町にはオットセイのほかには、サケとイルカの供養碑があります。

こうした水生生物の供養碑は沿岸地域に建立されているケースが多く見られます。そのため、東日本大震災の津波の被害を多く受けたものもあります。再建されるケースもあれば、再建には至っていないケースもあります。また、供養碑のなかには、今でも供養祭が行われるものもあれば、その存在すら忘れられ、ひっそりと佇んでいるものもあり、地域ごとに状況は異なります。ひょうたん島も津波に遭い、弁財天の流失は免れましたが、オットセイの供養碑は残念ながら一部が流失してしまいました。

現在では供養祭も行われていないため、大槌町とオットセイの繋がりを意識する機会はありません。さらに供養碑の存在

大槌町にあるオットセイの供養碑。



を知らない人もいますが、この繋がりは歴とした大槌町の歴史の一部です。こうした石碑は、各地に様々な形で残され、地域の歴史を今に伝える貴重な指標となります。

私は2017年4月に沿岸センターに着任して以来、動物供養碑を通して地域（人）と自然の関係について見えています。その過程で、新たな供養碑の発見もありました。まだまだ発見されていない供養碑も多くあると思います。今後も種々の供養碑を通して、地域の歴史を捉え直す手がかりにしていきたいと思っています。

調査船 弥生のつばやき

赤浜新ランドマークタワー

ここ赤浜に、新しいランドマークタワーが出来ました。係船場ジブクレーンです。

AORI（大気海洋研究所英略）マークも鮮やかな、高さ8メートル、旋回範囲8メートルのこのクレーンは、「上架」と呼ばれる、船舶メンテナンスの陸揚げ作業のために使用するものですが、台風、高波等の荒天時、船舶を保護するための陸揚げにも使用します。

昨年夏に東北地方を直撃した台風10号の記憶も新しいところですが、今年は

10月に入っても台風が上陸したように、荒天が度々ありました。昨年までは、台風が来る数日前に係船場から離れた大きな漁港やドックに行かなければならないところ、今では係船場内に直ちに上架することができます。台風一過、波が落ち着けば、直ぐに調査へ出航です。

沿岸センター所属船舶のうち、このクレーンで上架経験がないのは私だけになりました。いつか上架してもらおう時

のために、頑張ってダイエットの真っ最中です。



上架してもらえぬ日が待ち遠しい。



制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）